

石井久雄先生を送ることは

日本語学について門外漢のわたくしが石井先生の送別のことを書くのが適任なのかどうかはわからないが、学問とひととなりについて私見を述べてみるのも悪くないと思った。以下はまさにわたくしの思い込み、いや思い入れということでお許しください。

石井久雄の学問は、緻密さと大胆さが共存し、常に俯瞰的に日本語の本質を問い続ける。学問には、この両面が必要であり、それをさまざまな局面で実証実験しているようなところがあつた。学問とひととなりがつながりなのだ。

会議がひとつの方向に向かいだしたとき、それでいいのかと問いかける。こんな選択肢だつてありえるのではないかと。研究発表でも、論文の口頭試問でも、独創性と着想を重視した。「なぜあなたはそれをするのか」、そういう問いかけが常にあつたように思う。研究でも教育指導上でもそれは変わらなかつた。中途半端な妥協はなかつた。それは小気味よいぐらいだつた。議論が難局にさしかかると、石井節が炸裂する。時には会議が混乱することもあるが、その発想のおもしろさと率直な物言いがわたくしは大好きだ。少し年上の先輩だが、ほとんど年の差を感じさせない。無礼な物言いをいつも寛大に許して頂いていた。

正直、赴任された当初はこうした発言や行動が突拍子もなく見えた。だが、その突拍子のなごの背後に石井久雄という人があることにだんだん気づかされていった。それは石井流の生き方であり、自由に自在に自らの人生を生きる強靱な意志と誰にも縛られない筋金入りの自由人としての生き方であつた。新島襄は、FREEDOM IS MY LIVING MOTTO. 自由は予が生ける標語である、と語つたが、まさにそれだと思つた。生意気な言い方だが、そのことに気づくと、石井久雄がなんだか突然チャームリングに見えてきた。自分の自由を認める限り、他者の自由も最大限受け入れる。他者を尊重する姿勢は、発言や行動にももの見事にあらわれた。誰かの悪口や陰口を言うところをほとんど見たことがない。批判はするが、文句は

言わない。筋が通らなければどんな場所でもひと言発言する。間違えば潔く謝罪する。自由人とはこのような人のことを言うのだろう。

疲れ切ったときに、エレベーターのなかで、「お互い年なんだから、こんなものですよ」と声をかけられると、そんなものだよなとふっと気持ちが悪くなった。ひよっとしたら、石井流に人間の一生なんて人類の歴史のなかでいえば、ほんの一角でしかないんだから、自由に自在に生きればいいのかと教えてくれたのかもしれない。無理をすることはないんだ、老いることも自然に身を任せることだからとおっしゃりたかったのかもしれない。さりげない気配りと笑顔に救われた。

大学は違うが、ちょうど同じ世代として学生時代を過ごした者同士、大前提の部分が共通しているところがあるのだろう。そこは取り立てて説明する必要はない。縛られるのが嫌いなのだ。因襲や常識にとらわれるのもいやなのだ。こうした反骨の精神は世代論では解けないことは百も承知の上である。きっとそんな十把一絡げの考え方で縛られるのも好きではないに違いない。ただ、国文学科（当時国文学専攻）の舵取りが一番難しい時期のわたくしを知ってくれている人のひとりだから、わたくしの反骨の精神も一番よくわかってきているだろう。この反骨の精神は、大げさな言い方かもしれないが、常に弱者や少数者の救済・支援に向いていた。非力な者、若き者、傷ついた者をじっと見守っていたように思う。そんな骨太で心優しい先輩と別れるのは何とも淋しい。

わかったようなことを書いているが、やはり、石井久雄という人物は不思議なベールに包まれている。いつもクールな雰囲気を見ていると、こんなふうにも思う。論理をころもに包んで揚げると、こんなふうになるのだろうか。けっして食えないと言っているのではない。なぜならこの天ぶらはさくさくして実に深い味わいがあり、天つゆで食べるもよし、塩であつさり食べるもよし、そのまま食べるもよし、自由に楽しむことができる。自由を愛し、自由を楽しみ、自由を誇り、自由に遊ぶ。少し早いお別れも、そんな境涯を象徴しているのだろう。また、おいしいものを食べながら一献傾けたいものである。